

# ふてしこ

11 '17  
No.264

巡回通信誌



## 「こわいもの知らずの病理学講義 仲野 徹」

名誉院長 西 田 敬

新聞広告（冒頭写真）が目についたので Amazonに注文した。降って湧いた様に、今年から出現した秋期3連休。無聊を慰めるには恰好の読物と北叟笑む。流石に現職の阪大病理学教授の労作、案の定、骨っぽくて芯がある。狂言回し役として使われているのは御馴染、コンピューター界の百科事典を標榜するWikipediaと、御存知、これまたencyclopedia的な国語辞典、広辞苑。

医学生は勿論、看護師さんを始めとするco-medicalのスタッフにもお勧め。医者言う事や、目論見が全て解る、のみならず、治療計画の先まで見通せる。更には、virus 発がんの藤波艦、化学発癌の山極勝三郎など、ノーベル

賞を掠め乍も、逸した日本人研究者の挿話も紹介され、面白さも半端じゃない。文字通り「巻を措く能わず」、将に興味津津の読物として展開される。

とは言え、内容は飽く迄も21世紀の病理学総論。新規登場の外来医学用語の翻訳（解説）が主体と為り、系統的には解体新書（Anatomische Tabellen）の流れを汲む。勿論、時代の差は語彙に反映される。仲野教授は今回は i) 纖毛運動不全に起因する副鼻腔炎、ii) 気管支拡張症、iii) 内臓逆位症（situs inversus）を三主徴（trias）とする Kartagener syndrome（カルタゲナー症候群）を取上げて症状発現の機序を詳説しており、興味は尽きない。が、俟て暫し。如何にも判り易そうなタイトル表紙に騙されちゃいかん。中でも、線毛、絨毛の機能不全とkinesinを介した内臓逆位の因果関係は読み進むほどに難解。著者は読む事でliteracyが向上すると請合っておられるが、そりゃ向上するわナ。読む事と読解するは同義語じゃない。持て余した暇と時間を枕に寝乍読めるなんぞと甘かった。何時の間にもやらガバと跳ね起き、辞書を片手に机についてウンウン苦勞して読み進んでいる。Virchow病理の時代ではない。分子生物学や遺伝子病理の御時勢。語彙の拡張が要求され、著者の術中にまんまと嵌った次第。



済生会日田病院

（ホームページ <http://saiseikai.hita.oita.jp>）